

チタン研究を通じて広がる人の輪

東北大学素材工学研究所 岡部 徹

金研にはあまり足を踏み入れる機会のない若造の私を、このたび本会会長平林眞先生のご推薦により本会会員の末席に加えて頂きました。チタンの研究を通じて広がった人の輪のおかげで伝統ある研友会に入会することになりましたが、正直申しまして恐縮しております。

私と金研との最初のつながりは、京大小野研のドクターコースで行なったチタンの精錬に関する研究に対して本多記念会から奨励賞を頂戴した時に始まりました。学位取得後すぐに米国MITに留学したため、チタンの研究は3年ほど中断しておりましたが、留学中に本多光太郎先生の伝記を読み、また、金研出身のアクティビティーの高い研究者の方々とお知合いになりました。かねてより金研の研究レベルの高さは認識しておりましたが、海外から日本の材料研究社会を俯瞰する機会に恵まれ、金研の突出した研究者の陣容と世界的な知名度を再認識しました。

帰国後、私が東北大学素材研に赴任してすぐにチタンの製造プロセスの開発に関する研究を開始できたのは、竹内研のご出身の早稻田所長にチタンに対するご理解があり、あらゆる面で援助して下さいましたからです。偶然この研究にNK Rの二上愛氏のご興味を示され、学生時代の親友である平林先生に私を研友会の皆様に紹介するように頼まれたようです。親子以上の年齢差がある大先生がわざわざ素材研に足を運んで、私の研究についてお問合わせ頂いた時には、恐縮すると同時に戸惑いを覚えました。

振り返りますと、京大の学生時代にチタン中の固溶酸素の侵入位置の解析に関する Koiwa and Hirabayasi 論文(1969)を幾つか読んで感銘を受け、小岩先生にはいろいろと懇切にお教え頂きましたものの、まさか共著者の Hirabayasi 先生がお元気でられるとは夢にも思っておりませんでした。実を申しますと、今回推薦者となって頂きました平林会長が、かの平林先生と同一人物であることを認識したのは、迂闊にもかなり時が経ってからです。チタンの研究をしていなければ、本会とは縁もゆかりもない私ですが、偶然の重なりとは申せ研究を通じてバックグラウンドも世代も異なる大先生とお知合いになれば、これを機縁にさらに一段と広がった人の輪の大切さを再認識した次第です。

ところで、先日は本会の赤坂光子女史のご案内で金研資料室をご案内頂き、そこに展

示されている旧竹内研時代につくられた気相析出チタンの見事な標本にいたく感銘を受けました。残念ながら、現在レアメタルのプロセスの研究を行っておられる研友会の方は少なくなっただけでしたが、金研はチタンの製造研究においても草分け的な存在です。私は一材料研究者としてチタンをはじめとするレアメタルプロセスの研究は今後も続けて行きたいと考えております。

つきましては、本会の一員として研友会の名を汚さないよう少しでも良い研究をするよう心掛けますので、皆様方のご指導ご鞭撻をよろしくお願い申し上げます。

('チタン研究を通じて広がる人の輪', 岡部 徹: 研友, vol.57 (1999) p.43. より転載)